

2025年10月5日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教55 「羊はその声を聞く」

エゼキエル34:11~14、ヨハネ10:1~5

「はつきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盜人であり、強盗である」（1節）ここでは、まず良い羊飼いのことではなく、盜人、強盗のことが言われます。それは羊を養うのではなく、羊を盗み、食い物にする者たちの存在です。この盜人、強盗が具体的に誰を指しているのか。イエスさまはこの話をファイリサイ派の人々に話されたとあります（6節）。彼らはこの目の見えなかつた人を会堂から追い出しました。囲いから羊を追い出した。そのファリサイ派に向かってイエスさまは羊の話をします。あなたたちは羊を養っていない。役に立たないと思えば簡単に追い出す。そういう盜人のような者だ。これは厳しい批判です。

今日は旧約聖書のエゼキエル書を読みました。読みましたところは神さまが牧者となってイスラエルを養い導くというところです。けれども、その前のところはイスラエルの牧者、王のもとに国が荒廃していくことが記されています。「お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかつた。また追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力づくりで、過酷に群れを支配した。彼らは飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりぢりになつた・・・牧者は群れを養わず、自分自身を養っている」（34:4~5、8）この言葉はアッシリアやバビロニアによる捕囚を意味しているでしょう。悪い指導者のもとに国は滅ぶのです。イエスさまは、ファリサイ派の人たちもまたそのように羊を養っていないと批判されます。

ある牧師が説教の中で、今日の箇所を読んで「ぐさりと胸に突き刺さる言葉だ」と書いていました。牧師は英語でパスター（羊飼い）です。牧会（パストラルケア）という言葉があります。群れを牧する。自分は果たして羊飼いとしてちゃんと羊を養っているだろうか。それよりも自分自身を養っていないか。神さまの栄光のためではなく、自分の栄光のために働いていないか。あるいは羊を囲いから追い出すようなことをしていないか。だからこそ真の牧者であるイエスさまから目をそらさぬようにしなければなりません。イエスさまに照らして絶えず悔い改め、自分を正すことなしに牧師は続けられません。

この1節に盜人、強盗の特徴として「門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は盜人であり、強盗である」とあります。囲いを乗り越える。この囲いも様々な解釈がありますが、例えば、その人の尊厳を脅かすような、その人の人格や自由が尊重されずに、勝手に乗り越えて、土足で踏み込んでそれを支配するようなことがあれば、それはまさに盜人ではないでしょうか。十戒の第八戒「盗んではならない」はもともと人を盗む、誘拐の禁止であると言われます。わたしたちは知らず知らずのうちに人を盗むのです。人の領域に入り込んで自由を奪う。その人の生き方や考え方を否定する。あらゆる人間関係でそういうことが起こるでしょう。夫婦、親子の関係でもそうです。囲いを乗り越えていないか。囲いを乗り越えて、子どもの尊厳を奪い、自分に従わせようとしていないか。そのようにして羊は弱り果てていくのです。だからこそわたしたちは真の羊飼いであるイエスさまに養われる必要があります。

「門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼

いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出されると、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、「ついて行く」(2~4節)ここには麗しい羊飼いと羊の関係があります。これは羊飼いの日常の光景と言われます。夜、羊はみな囲いの中に入っています。羊飼いは朝になると門から囲いの中に入り、羊たちを連れ出して先頭に立って牧草のあるところに導いていく。また夕方には囲いの中に連れ帰る。そういう日常があります。マタイやマルカが伝える見失った一匹の羊は、この連れ帰る時に羊飼いが一匹いないことに気づくのです。それにしても一匹いないことに気づくというのはすごい能力です。今日のところでも「自分の羊の名を呼んで連れ出す」とありました。羊飼いは一匹一匹を知っているのです。

神さまは、わたしたちをそのように知っておられます。「主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる」(詩編139:1)どうしてでしょう。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」(1:14)まことの神さまがわたしたちと同じ肉体をお取りになって、まことの人となられました。ただ上から眺めておられたのではなく、わたしたちのところに来て、見て、知ってくださった。人間としての喜びも悲しみも全て経験された。最後は十字架の死を経験された。わたしたちが経験する以上の苦しみ、痛みを経験されました。わたしたちはなかなか人の苦しみや痛みをわかつてあげられません。けれども神さまは知っておられます。今、わたしたちが抱えているその苦しみをご存知です。だからこそわたしたちは信頼し、安心してこの羊飼いについていくのではないでしょうか。

その信頼がよく表れている言葉があります。「羊はその声を聞き分ける」(3節)「羊はその声を知っているのでついて行く」(4節)羊はそのイエスさまの声を知っている。そしてそうではない声を聞き分けることができるということです。羊飼いが一匹一匹を知っていることもすごいことですが、羊もまたその声を聞き分ける力がある。でもそれはいつも羊飼いの声を聞いていたから自然と身についたのでしょうか。羊飼いがいつも一緒にいて、声をかけ続けていたからです。そこには信頼関係があるのです。

今日は宗教改革を覚える月です。わたしたちの教会は宗教改革によって生み出されたプロテスタントの教会です。宗教改革の戦いとは、教会の中にイエスさま以外の声が聞こえてくることとの戦いということができます。イエスさまの声、イエスさまの救いではなく、別の仕方でも救いが可能であるかのような教えが説かれる。そこには当然聖書との矛盾が生じるでしょう。そこに信頼関係は生まれません。そのようにして羊は弱り果てていくのです。でも改革者たちは、イエスさまの声を取り戻す戦いをしました。その戦いは今も続いていると言ってもよいでしょう。教会の中にイエスさま以外の声が聞こえてこないでしょうか。パウロは「狼が入り込んで群れを荒らす」(使徒言行録20:29)と述べています。そのようにして教会が壊され、羊が散らされていきます。けれどもイエスさまはそういう痛みもすべて知っておられます。その罪を背負って十字架で死んでくださいました。そしてよみがえりの命をもって、羊の群れを回復させてくださいます。そこにわたしたちは信頼し、望みをかけています。

天の父よ。ただイエスさまの声だけを聞き続けることができますように。わたしたち一人ひとりの名を呼んで救いの牧場に導いてくださる主に信頼して歩むことができますように助けてください。主の御名によって祈ります。アーメン。